天草方言で読む【竹取物語】　鶴田　功〈訳文〉

竹取物語　〈原文〉

いまは昔、竹取の翁といふもの有けり。野山にまじりて竹を取りつゝよろづの事に使ひけり。
　名をば、讃岐の造となむいひける。その竹の中に、もと光る竹なむ一筋ありける。
　あやしがりて寄りて見るに、筒の中光りたり。
それを見れば、三寸ばかりなる人いとうつくしうてゐたり。翁いふやう、「我朝ごと夕ごとに見る竹の中におはするにて、知りぬ。
　子となり給ふべき人なめり」とて、手にうち入れて家へ持ちて来ぬ。妻の女にあづけて養はす。うつくしき事かぎりなし。いとをさなければ籠に入れて養ふ。
　竹取の翁、竹を取るに、この子を見つけて後に竹とるに、節を隔てゝよごとに金ある竹を見つくる事かさなりぬ。かくて翁やうやう豊になり行く。この児、養ふ程に、すくすくと大きになりまさる。

　三月ばかりになる程によき程なる人になりぬれば、髪上げなどさうして、髪上げさせ、裳着す。

帳のうちよりも出ださず、いつき養ふ。この兒のかたちけうらなる事世になく、屋のうちは暗き所なく光り満ちたり。

〈意訳〉

　今じゃ、だいぶ昔ン話じゃばって、〈竹取り爺さん〉ちゅう人のおらしたっちゅた。

毎日野山にひゃーって、竹取りしてにゃ、色んな物に使いよらした。 そン人の本名は、讃岐の造ちゅわすと。

　ある日、竹バ切りよらしたりゃ、根元ン方の光っとる竹ンー本あった。不思議に思うて側に寄っていたりゃ、竹ン中が光っとった。そりバゆう見れば、身の丈三寸ぐりゃん人が、どもこもみぞうか姿で潜ンどんなさった。

　そこで、爺さんが言わすとにゃ「私が毎日朝晩ずうっと見とる竹ン中におらすとじゃけん合点のいきやした。あなた様は当然私が生んだ子どもじゃなかばって、私が子どもになんなさる人じゃろう」ちゅうて、わーが手ン中ゃ入れて、家さん連れて帰って、女房の婆さんに預けて育てらした。

　そん、みぞうさちゅうたら、この上無しじゃった。何せ、どもこも小かもんじゃっで、籠ン中に入れて養い育てらした。

竹取り爺さんがこん子バ見つけてから後は、竹バ取るたんびに、節バ隔てて、どん竹にも黄金が入っとった。こがん訳で、爺さんナだんだん金持ちにならした。
こン子は、養っていく内に、ずんずんふとうたこう成長した。三月バかりのうちに人並みん背丈ん女になったけん、成女ン儀式も万端手配して，髪上げバさせたり、裳着バさせたりした。

御帳ン中から外にも出さんごてして、大事に大事をとって可愛(みぞが)って育てとりました。処が、こん幼子ン容貌がなんさま清らかで美しゅうして、世間に較べもんがなか。家ン中は暗か処もなかごて、隅々まで光り輝いとっと。

爺さんナ、気分が勝れず苦しい時も、この子を見れば苦しさもふっとうだ。腹立たしかことも、こん子バれば慰めらるっと。
さて、爺さんナ黄金がはいっとる竹を取ることが長ごう続きました。そっで富み栄えて豪華な長者にならしたげなですタイ。
そして一方、この子がずっと大きくなったけん、三室戸の齋部秋田バ呼うで名バ付けさせらした。
秋田は「なよ竹のかぐや姫」と名付けらした。
名付け祝いの前後三日間は宴バ催して、音楽バ奏でました。そして色々な管絃の催しで男女の隔てなく大勢を呼び集めて、えらいナ宴会ぶりじゃった。
天下の男ちゅう男は、高貴な方もおろいか者も、どがんかしてこんかぐや姫バ手に入れたいもんだ、一目でも見たいもんだちゅて、評判バ聞きつけ思い悩んでおった。
ばって、その辺の垣根近くとか、近所に住んどる者でさえ簡単にゃ見られんとに、夜は眠えりもせぇでにゃ、闇夜に出てきて垣根に穴バあけてあちこちから覗ぇたり垣間見したり、誰もが心乱しておった。
※ **さる時よりなむ「夜這ひ」とは言いける。**（そん時以来、〈夜這い〉ちゅうごてなった）

せめて、娘の家ン人(しい)にことばの一つでん掛けたかともうても、うちおうてくれらっさん。

そっでも懲りでにゃ、そこば離れん公達があたりば彷徨うて夜明かしする人ン増えてきた。
そン中でん懲りずに言い寄って来た者は、恋の通人ちゅわるる五人じゃった。石作りの皇子・車持ちの皇子・右大臣阿部の御主・大納言大伴の御行・中納言石上の麻呂の五人な昼も夜も、思い忘るることなく通い続けらした。

さて、かぐや姫が絶世の美女であることば帝(みかど)がお聞き遊ばれて、内侍の中臣のふさ子

に「沢山の人々が命をかけて恋い慕っても、とうとう嬢(あ)わでにゃ押し通したとかいうかぐや姫とはどがん女か、お前行って見てけ」
一方彼らがあきらめそうになかもんだけん、翁はかぐや姫に「女は男と結婚するもんだ。お前も彼らの中から選べ」と言わしたりゃ、かぐや姫は「なぜ結婚せんばんとじゃろうかい」と嫌がるが、「『私の言う物バ持って来ぃきればその人と結婚しましょうだ』

と彼らに伝えてくだっせ」と言うた。夜になると、例の五人が集まって来た。翁は五人の公達バ集め、かぐや姫の意思バ伝えた。

　その意思とは石作皇子には仏の御石の鉢、車持ちの皇子には蓬莱(ほうらい)の玉(ぎょく)の枝、右大臣阿倍御主人には火鼠の裘(かわごろも)、大納言大伴御行には龍の首の珠、中納言石上麻呂には燕(つばめ)の子安貝バ持ってこさせるというものじゃった。どれも話にしか聞かン珍しい宝ばかりで、手に入るっとは困難な物ばかりじゃった。

　石作は只の鉢バ持っていたてばれた。車持は偽物バわざわざ作ったが職人がやってきてばれた。阿倍はそれは燃えン物とされていたとに燃えてしもたけん別物じゃった。

　大伴は嵐に遭うて諦めた。石上は大炊寮の大八洲ちゅう名の大釜が据えてある小屋ン屋根に上って取ろうてして腰バ打ち、断命した。結局、誰一人として成功せんじゃった。

　そんな様が帝(みかど)に伝わり、姫に会いたがった。喜ぶ翁の取りなしにも関わらず、彼女はあくまで拒否を貫いたばって、不意をついて訪ねてきた帝に姿バ見られてしもた。ところが一瞬のうちに姿バ消して地上の人間でなかところバ見せて、結局帝をも諦めさせた。
　ばって、彼と和歌の交換ナするごてなった。

　　月さん帰って行くかぐや姫

　帝と和歌バ遣り取りするごてなって三年の月日が経った頃、かぐや姫は月バ見て物思いに耽(ふけ)るごてなった。八月の満月が近づくにつれ、かぐや姫は激しく泣くごてなり、翁が問うたりゃ「自分はこの国の人間ではなか月の都の人であり、十五日には帰らんばん」という。それバ帝が知り、翁の意バ受けて、勇ましい軍勢バ送るこてなった。
　そして当日、子の刻頃、空から天人が降りてきたばって、軍勢も翁も嫗も戦意喪失して抵抗でけんまま、かぐや姫は月さん帰ってはってく。別れの時、かぐや姫は帝に不死の薬と天の羽衣、帝を慕う心を綴った文バ贈った。
　しかし帝はそれを駿河国の日本一高っか山で焼くごて命じた。それからそン山は「不死の山」（後の富士山）と呼ばれ、そン山からは常時、煙が上がるごてなった。

　世の中に多かる人をだに、すこしもかたちよしと聞きては、見まほしうする人どもなりければ、かぐや姫を見まほしうて物も食はず思ひつつ、かの家に行きてたたずみありきけれど、かひあるべくもあらず。文を書きてやれど、返事せず。わび歌など書きておこすれども、かひなしと思へど、霜月しはすの降り凍り、水無月の照りはたたくにも、障らず来たり。この人々、ある時は竹取を呼び出て「娘を吾にたべ」と、ふし拝み、手をすりのたまへど「おのがなさぬ子なれば、心にも従はずなんある。」と言ひて、月日すぐす。かかれば、この人々、家に帰りて物を思ひ、祈を

し、願を立つ。思ひやむべくもあらず。「さりとも、つひに男あはせざらむやは」と思ひて、頼みをかけたり。あながちに心ざし見えありく。

これを見つけて、翁、かぐや姫に言ふやう「我子の仏、変化の人と申しながら、ここら大きさまで養ひたてまつる志おろかならず。翁の申さん事は聞き給ひてむや」と言へば、かぐや姫「なにごとをか、のたまはん事は、うけたまはらざらむ。変化の物にて侍りけん身とも知らず、親とこそ思ひたてまつれ」と言ふ。翁「うれしくも、のたまふものかな」と言ふ。

「翁、年七十に余りぬ。今日とも明日とも知らず。この世の人は、をとこは女にあふことをす、女は男にあふ事をす。その後なむ門ひろくもなり侍る。いかでか、さることなくてはおはせん。」かぐや姫のいはく「なんでふ、さることか、し侍らん」と言へば、「変化の人といふとも、女の身持ち給へり。翁のあらむ限りは、かくてもいますかりなむかし。この人々の年月をへて、かうのみいましつつのたまふことを、思ひ定めて、一人一人にあひたてまつり給ひね」と言へば、かぐや姫のはく、「よくもあらぬかたちを、深き心も知らで、あだ心つきなば、後くやしき事もあるべきを、と

いうばかりなり。世のかしこき人なりとも、深き心ざしを知らでは、あひがたしと思」と言ふ。

翁いはく、「思ひのごとくも、のたまふものかな。そもそもいかやうなる心ざしあらん人にか、あはむとおぼす。かばかり心ざしおろかならぬ人々にこそあるめれ」。かぐや姫のいはく、「なにばかりの深きをか見んと言はむ。いささかの事なり。人の心ざし等しかるなり。

いかでか、中に劣り優りは知らむ。五人の中に、ゆかしきものを見せ給へらんに、御心ざしまさりたりとて仕うまつらんと、そのおはすらん人々に申し給へ」と言ふ。「よき事なり」と承けつ。

日暮るるほど、例の集まりぬ。あるいは笛を吹き、あるいは歌をうたひ、あるいは唱歌をし、あるいはうそぶき、扇を鳴らしなどするに、翁出でていはく、「かたじけなく、きたなげなる所に年月をへて物し給ふこと、極まりたるかしこまり」と申す。「『翁の命、今日明日とも知らぬを、かくのたまふ君達にも、よく思ひ定めて仕うまつれ』と申すもことわりなり。『いづれも劣り優りおはしまさねば、御心ざしの程は見ゆべし。仕うまつらん事は、それになむ定むべき』と言へば。これよき事なり。人の御恨みもあるまじ」と言ふ。五人の人々も「よき事なり」と言へば、翁入りて言ふ。かぐや姫「石つくりの皇子には、仏の御石の鉢といふ物あり。それをとりてたまへ」と言ふ。「くらもちの皇子には、東の海に蓬莱といふ山あるなり。それに銀を根とし、金を茎とし、白き玉を実として立てる木あり。それ一枝をりて賜はらん」と言ふ。「今ひとりには、唐土にある火鼠のかはぎぬを賜へ。大伴の大納言には、龍の首に五色に光る玉あり、それを取りて給へ。いそのかみの中納言には、燕の持たる子安の貝、ひとつとりて賜へ」と言ふ。翁、「かたき事どもにこそあなれ。この国にある物にもあらず。かく難き事をば、いかに申さむ」と言ふ。かぐや姫、「何か、難からん」と言へば、翁、「とまれかくまれ申さむ」とて、出て、「かくなむ。聞ゆるやうに見せ給へ」と言へば、皇子達・上達部聞きて、「おいらかに、あたりよりだにな歩きそ、とやはのたまはぬ」と言ひて、

倦んじて皆帰りぬ。

なほ、この女見では、世にあるまじき心地のしければ、「天竺にある物ももて来ぬものかは」と思ひめぐらして、石つくりの皇子は、心のしたくある人にて、「天竺に二となき鉢を、百千万里の

程行きたりとも、いかでかとるべき」と思ひて、かぐや姫のもとには、「今日なん天竺へ石の鉢とりにまかる」と聞かせて三年ばかり、大和国十市郡にある山寺に、賓頭盧（びんづる）の前なる鉢の、ひた黒に墨つきたるをとりて、錦の袋に入れて、造り花の枝につけて、かぐや姫の家にもて来て見せければ、かぐや姫、あやしがりて見るに、鉢の中に文あり。ひろげて見れば、

海山の道に心をつくしはて　ないしのはちの涙ながれき

かぐや姫、「光やある」と見るに、蛍ばかりの光だになし。

置く露の光をだにも宿さまし　をぐら山にて何もとめけん

とて返し出だす。鉢を門に捨てて、この歌の返しをす。

しら山にあへば光のうするかと　はちを捨ててもたのまるるかな

と詠みて入れたり。かぐや姫、返しもせずなりぬ。耳にも聞き入ざりければ、言ひわづらひて帰りぬ。かの鉢を捨ててまた言ひ寄りけるよりぞ、面なき事をば、「はぢを捨つ」とは言ひける。

蓬莱の珠の枝

くらもちの皇子は、心たばかりある人にて、おほやけには、「筑紫の国に、湯浴みにまからむ」とて、暇申して、かぐや姫の家には、「玉の枝とりになむまかる」と言はせて、下り給ふに、仕うまつるべき人々、みな難波まで御送りをしける。皇子、「いと忍びて」とのたまはせて、人もあまた率ておはしまさず。近う仕うまつるかぎりして出で給ひぬ。御送りの人々見たてまつり送りて帰りぬ。「おはしぬ」と人には見え給へて、三日ばかりありて漕ぎ帰り給ひぬ。かねて事みな仰たりければ、その時ひとつの寶なりける鍛冶匠六人を召しとりて、たはやすく人寄り来まじき家を作りて、かまどを三重にしこめて、匠らを入れ給ひつつ、皇子も同じ所に籠り給ひて、しらせ給ひたるかぎり十六そを、かみにくどをあけて、玉の枝を作り給ふ。かぐや姫のたまふやうに違はず作り出でつ。いとかしこくたばかりて、難波にみそかにもて出でぬ。「舟に乗りて帰り来にけり」と殿に告げやりて、いといたく苦しがりたるさましてゐたまへり。迎へに人多くまゐりたり。玉の枝をば長櫃に入て、物おほひて持ちてまゐる。いつか聞きけん、「くらもちの皇子は優曇華の花持ちて上り給へり」と、ののしりけり。これをかぐや姫聞きて、我は皇子に負けぬべしと、胸うちつぶれて思ひけり。

かかる程に、門をたたきて、「くらもちの皇子おはしたり」と告ぐ。「旅の御姿ながらおはしたり」と言へば、会ひたてまつる。御子のたまはく、「命をすてて、かの玉の枝持ちてきたる、とて、かぐや姫に見せたてまつり給へ」と言へば、翁持ちて入りたり。この玉の枝に文ぞつきたりける。

いたづらに身はなしつとも玉の枝を　手をらでただに歸らざらまし

これをあはれとも見でをるに、竹取の翁はしり入りていはく、「この御子に申し給ひし蓬來の玉の枝を、ひとつの所誤たずもておはしませり。なにをもちてとかく申べき。旅の御姿ながら、わが御家へも寄り給はずしておはしたり。はやこの皇子にあひ仕うまつり給へ」と言ふに、物も言はで、頬杖をつきて、いみじうなげかしげに思ひたり。この皇子「いまさへ何かと言ふべからず」と言ふままに、縁にはひ上り給ぬ。翁、理に思ふに、「この国に見えぬ玉の枝なり。この度はいかでか辞び申さむ。様もよき人におはす」など言ひゐたり。

かぐや姫の言ふやう、「親のの給ことを、ひたぶるに辞び申さん事のいとほしさに」。

取りがたき物を、かくあさましくてもてきたる事をねたく思ひ、翁は閨のうち、しつらひなどす。

翁、皇子に申やう、「いかなる所にか、この木はさぶらひけん、あやしく、うるはしく、めでたき物にも」と申す。皇子答へてのたまはく、「さをととしの、二月の十日ごろに、難波より船に乗りて、海の中に出でて、行かん方も知らず覚えしかど、思ふこと成らでは世の中に生きてなにかせん、と思ひしかば、ただ空しき風にまかせてありく。命死なばいかがはせん、生きてあらむかぎりは、かくありて、蓬莱といふらむ山に逢ふやと、浪に漕ぎただよひありきて、わが国のうちをはなれて、ありきまかりしに、ある時は、浪に荒れつつ海の底にも入りぬべく、ある時は、風につけて知らぬ国に吹き寄せられて、鬼のやうなるもの出で来て殺さんとしき。ある時には、来し方行末も知らず、海にまぎれんとしき。ある時にはかてつきて草の根をくひものとしき。ある時は、言はん方なくむくつけげなるもの来て、食ひかからんとしき。ある時には、海の貝をとりて命をつぐ。旅の空に助け給ふべき人もなき所に、いろいろの病をして、行く方そらもおぼえず。舟の行くにまかせて海にただよひて、五百日といふ辰の時ばかりに、海の中に、はつかに山見ゆ。舟のうちをなむせめて見る。海の上にただよへる山、いと大きにてあり。その山のさま、高くうるはし。これやわが来むる山ならんと思ひて、さすがに恐ろしくおぼえて、山のめぐりをさしめぐらして、二三日ばかり見ありくに、天人の装ひしたる女、山の中より出来て、銀のかなまりを持ちて、水を汲みありく。これを見て、舟より下りて、「山の名を何とか申す」と問ふ。女、答へていはく、「これは蓬來の山なり」と答ふ。これを聞くに、うれしき事かぎりなし。この女、「かくのたまふは誰ぞ」と問ふ、「わが名はうかんるり」と言ひて、ふと山の中に入りぬ。

その山見るに、さらに登るべきやうなし。その山のそばひらを巡れば、世の中になき花の木どもたてり。黄金・銀・瑠璃色の水、山より流れ出でたり。それには色々の玉の橋渡り。そのあたりに、照り輝く木どもたてり。その中に、このとりてまうできたりしは、いと悪かりしかども、「のたまひしに違はましかば」とて、この花ををりてまうできたるなり。山はかぎりなくおもしろし。世にたとふべきにあらざりしかど、此枝ををりてしかば、さらに心もとなくて、舟に乗りて、追風吹きて、四百余日になむまうで来にし。大願力にや、難波より、昨日なん都にまうで來つる。さらに潮に濡れたる衣をだに脱ぎかへなでなん、こちまうで来つる」とのたまへば、翁聞きて、うちなげきて詠める、

くれ竹のよゝの竹とり野山にも　さやはわびしきふしをのみ見し

これを御子聞きて、「こゝらの日ごろ思ひわび侍る心は、今日なん落ちゐぬる」とのたまひて、返し、

わが袂今日乾ければわびしさのちぐさの数も忘られぬべし

とのたまふ。かゝる程に、をのこども六人つらねて庭に出できたり。一人の男、文挟みに文をはさみて申す。「内匠寮の工匠、漢部内麻呂申さく、玉の木を作り仕うまつりし事、五穀断ちて、千余日に力を尽くしたること少なからず。しかるに禄いまだ給はらず。これをたまひて、けこにたまはせん」と言ひて、捧げたり。竹取の翁、この工匠が申すことは「なに事ぞ」と傾きをり。皇子は我にもあらぬ気色にて、肝消えゐ給へり。

これをかぐや姫聞きて、「この奉る文をとれ」と言ひて、見れば、文に申しけるやう、「皇子の君、千日いやしき工匠らともろともに同じ所に隠れゐたまひて、かしこき玉の枝作らせ給ひて、官も給はんとおほせ給き。これをこのごろ案ずるに、『御つかひとおはしますべきかぐや姫の要じ給べきなりけり』と、うけたまはりて、この宮より給はらん」と申して、「給はるべきなり」と言ふを聞

きて、かぐや姫の、暮るゝまゝに思ひわびつる心地、わらひさかえて、翁を呼びとりて言ふやう、「まことに蓬莱の木かとこそ思ひつれ。かくあさましき空ごとにてありければ、はやとく返し給へ」と言へば、翁答ふ、「さだかに作らせたる物と聞きつれば、返さむ事いとやすし」と、うなづきてをり。かぐや姫の心ゆきはてゝ、ありつる歌の返し、

まことかと聞きて見つれば　言のはを飾れる玉の枝にぞありける

と言ひて、玉の枝も返しつ。竹取の翁、さばかり語らひつるが、さすがに覚えて眠りをり。皇子は、立つもはした、居るもはしたにて、ゐ給へり。日の暮れぬれば、すべり出で給ぬ。

かのうれへせし工匠をば、かぐや姫呼びすゑて、「うれしき人どもなり」と言ひて、禄いと多くとらせ給ふ。工匠らいみじく喜びて、「思ひゐつるやうにもあるかな」と言ひて、帰る道にて、くらもちの皇子、血の流るゝまで調ぜさせ給ふ。禄得しかひもなく、皆とり捨てさせ給ひてければ、逃げうせにけり。かくてこの皇子は、「一生の恥、これに過ぐるはあらじ。女を得ずなりぬるのみにあらず、天下の人の見、思はん事の恥づかしき事」とのたまひて、ただ一ところ、深き山へ入り給ひぬ。宮司、候ふ人々、みな手を分かちて求めたてまつれども、御死にもやしたまひけん、え見つけたてまつらずなりぬ。皇子の御供に隠し給はんとて、年頃見え給はざりけるなりけり。これをなむ「たまさかなる」とは言ひはじめける。

火鼠の皮衣

右大臣あべのみむらじは、たから豊かに、家ひろき人にぞおはしける。その年きたりける唐船の、わうけいといふ人のもとに、文を書きて、「火鼠の皮といふなる物買ひておこせよ」とて、仕うまつる人の中に心たしかなるを選びて、小野のふさもりといふ人をつけて遣はす。もて到りて、唐にをるわうけいに、金をとらす。わうけい、文をひろげて見て、返事書く。「火鼠の皮衣、此國になき物也。おとには聞けども、いまだ見ぬなり。世にあるものならば、この國にも、もてまうで來なまし。いと難きあきなひなり。しかれども、もし天竺にたまさかにもて渡りなば、長者のあたりにとぶらひ求めむに。なき物ならば、使にそへて、金をば返したてまつらん」と言へり。かの唐船來けり。小野のふさもりまうで來て、まう上るといふ事を聞きて、歩み疾うする馬をもちて走らせむかへさせ給時に、馬に乗りて、筑紫よりたゞ七日に上りまうできたる。文を見るに、いはく、「火鼠の皮衣、からうじて、人を出して求めたてまつる。今の世にも、昔の世にも、此皮は、たはやすくなき物也けり。昔、かしこき天竺の聖、この國にもて渡りてはべりける、西の山寺にありと聞きおよびて、おほやけに申て、からうじて買ひとりてたてまつる。値ひの金少なしと、こくし使に申しかば、わうけいが物加へて買ひたり。いま金五十兩給るべし。舟の歸らむにつけてたび送れ。もし金給はぬ物ならば、かは衣の質返したべ」と言へることを見て、「なに仰す。いま金すこしにこそあなれ。かならずおくるべき物にこそあなれ。嬉しくしておこせたるかな」とて、唐の方に向ひてふし拜み給。この皮衣いれたる箱を見れば、くさぐさのうるはしき瑠璃を色へてつくれり。皮衣を見れば、金青の色なり。毛の末には、金の光し、さゝきたり。寶と見え、うるはしき事ならぶべき物なし。火に燒けぬ事よりも、けうらなること、ならびなし。「うべ、かぐや姫このもしがり給にこそありけれ」とのたまうて、「あなかしこ」とて、箱にいれ給て、ものゝ枝につけて、御身の化粧いといたくして、「やがて泊りなんものぞ」とおぼして、歌よみ加へて持ちていましたり。その歌は、限なきおもひに燒けぬ皮衣袂かはきてけふこそはきめと言へり。家の門にもていたりて、立てり。竹取出きて、とり入れて、かぐや姫に見す。かぐや姫の、皮衣を見ていはく、「うるはしき

皮なめり、わきてまことの皮ならむとも知らず」。竹取答へていはく、「とまれかくまれ、まづ請じ入たてまつらむ。世中に見えぬ皮衣のさまなれば、これをと思ひ給ね。人ないたくわびさせたてまつらせ給そ」と言ひて、呼びすゑたてまつれり。かく呼びすゑて、この度はかならずあはむと、女の心にも思ひをり。この翁は、かぐや姫のやもめなるを歎かしければ、よき人にあはせんと思ひはかれど、切に「いな」といふ事なれば、え強ひねば、ことわり也。かぐや姫、翁にいはく、「この皮衣は、火に燒かんに、燒けずはこそ、まことならめと思ひて、人の言ふことにも負けめ。「世になき物なれば、それをまことと疑ひなく思はん」とのたまふ。猶これを燒きて心みん」と言ふ。翁、「それ、さも言はれたり」と言ひて、大臣に、「かくなん申」と言ふ。大臣答へていはく、「この皮は、唐にもなかりけるを、からうじて求め尋ねえたる也。なにの疑ひあらむ。さは申とも、はや燒きて見給へ」と言へば、火の中にうちくべて燒かせ給に、めらめらと燒けぬ。「さればこそ。異物の皮なりけり」と言ふ。大臣、これを見給ひて、顔は草の葉の色にて居給へり。かぐや姫は、「あなうれし」と、喜びてゐたり。かの詠み給ける歌の返し、箱に入て返す。

なごりなく燃ゆとしりせば　皮衣思ひの外におきて見ましを

とぞありける。されば、歸りいましにけり。世の人々、「あべの大臣、火ねずみの皮衣もていまして、かぐや姫にすみ給ふとな。こゝにやいます」など問ふ。ある人のいはく、「皮は火にくべて燒きたりしかば、めらめらと燒けにしかば、かぐや姫あひ給はず」と言ひければ、これを聞きてぞ、とげなき物をば、「あへなし」と言ひける。

龍の首の珠

大伴のみゆきの大納言は、わが家にありとある人召し集めて、のたまはく、「龍の頸に、五色にひかる玉あなり。それ取りてたてまつりたらん人には、願はんことを叶へん」とのたまふ。をのこども、仰の事を承はりて申さく、「仰の事はいともたふとし。たゞし、この玉たはやすくえ取らじを。いはむや、龍の頸の玉はいかゞ取らむ」と申あへり。大納言の給、「てんの使といはんものは、命を捨てゝも、おのが君の仰ごとをば叶へんとこそ思ふべけれ。この國になき、天竺・唐の物にもあらず。此國の海山より、龍はおり上る物也。いかに思ひてか、なんぢら、難きものと申べき」。をのこども申やう、「さらばいかゞはせむ。難き事なりとも、仰ごとに從ひて求めにまからむ」と申に、大納言見わらひて、「なむぢらが君の使と、名を流しつ。君の仰ごとをば、いかゞは背くべき」との給て、龍の頸の玉取りにとて、出したて給。この人々の、道の糧食物に、殿内の絹・綿・錢など、あるかぎりとり出でゝ添へて遣はす。「この人々ども歸るまで、いもひをして吾はをらん。この玉取りえでは、家に歸り來な」とのたまはせけり。おのおの仰承はりて、まかり出ぬ。「『龍の頸の玉取りえずは、歸り來な』とのたまへば、いづちもいづちも、足の向きたらん方へいなむず。かゝるすき事をしたまふこと」と、そしりあへり。給はせたる物、おのおの分けつゝ取る。あるいはおのが家に籠りゐ、あるいはおのが行かまほしき所へ往ぬ。「親君と申とも、かくつきなきことを仰給ふこと」ゝ、事ゆかぬ物ゆゑ大納言をそしりあひたり。「かぐや姫すゑんには、例のやうには見にくし」との給て、うるはしき屋を造り給て、漆を塗り、まきゑして、かべし給て、屋の上に絲を染めて色々に葺かせて、内のしつらひには、言ふべくもあらぬ綾おり物に繪をかきて、間毎に張りたり。もとの妻どもは、かぐや姫をかならずあはん設して、ひとり明かし暮し給。遣はしし人は、夜晝待ち給に、年越ゆるまでおともせず。心もとながりて、いと忍びて、たゞ舍人二人召繼として、やつれ給て、難波の邊におはしまして、問ひ給事は、「大伴の大納言殿の人

や、舟に乗りて、龍殺して、そが頸の玉取れるとや聞く」と問はするに、船人答へていはく、「あやしき事かな」と笑ひて、「さる業する舟もなし」と答ふるに、「をぢなき事する舟人にもあるかな。え知らでかく言ふ」と思して、「わが弓の力は、龍あらばふと射殺して、頸の玉は取りてん。おそく來る奴ばらを待たじ」との給て、舟に乗りて海ごとにありき賜に、いととほくて、筑紫の方の海に漕ぎ出給ひぬ。いかゞしけん、疾き風吹きて、世界暗がりて、舟を吹もてありく。いづれの方とも知らず、舟を海中にまかり入ぬべく吹きまはして、浪は舟にうちかけつゝ捲き入れ、神は、落ちかゝるやうにひらめく。かゝるに、大納言まとひて、「またかゝるわびしき目見ず。いかならんとするぞ」との給ふ。楫取答へて申、「こゝら舟に乗りてまかりありくに、またかく、わびしき目を見ず。御舟海の底に入らずは、神落ちかゝりぬべし。もし幸に神の救あらば、南の海に吹かれおはしぬべし。うたてある主のみもとに仕うまつりて、すゞろなる死をすべかめるかな」と、楫取泣く。大納言これを聞きて、の給はく、「船に乗りては、楫取の申ことをこそ、高き山と頼め、などかく頼もしげなく申ぞ」と、青反吐をつきての給。楫取答へて申、「神ならねば、なに業を仕うまつらむ。風吹き、浪激しけれども、かみさへ頂に落ちかゝるやうなるは、龍を殺さんと求め給へばあるなり。はやても龍の吹かする也。はや神に祈りたまへ」と言ふ。「よき事也」とて、「楫取の御神、きこしめせ。をどなく、心をさなく龍を殺さむと思ひけり。いまより後は、毛の末一筋をだに動かしたてまつらじ」と、よ事をはなちて起ち居、泣々よばひ給事、千度ばかり申給ふけにやあらん、やうやう神、鳴り止みぬ。すこし光りて、風はなほ疾く吹、楫取のいはく、「これは龍のしわざにこそありけれ。この吹風は、よき方の風なり。あしき方の風にはあらず。よき方に赴きて吹くなり」といへども、大納言は、これを聞き入れ給はず。三四日吹て、吹き返しよせたり。濱を見れば、播磨の明石の濱也けり。大納言、南海の濱に吹きよせられたるにやあらんと思ひて、いきづき伏し給へり。船にあるをのこども國に告げたれども、國の司まうでとぶらふにも、え起き上り給はで、舟底に伏し給へり。松原に御莚しきて、下したてまつる。その時にぞ、南海にあらざりけりと思ひて、からうじて起き上り給へるを見れば、風いと重き人にて、腹いとふくれ、こなたかなたの目には、杏を二つつけたるやう也。これを見たてまつりてぞ、國の司もほほゑみたる。國に仰せ給て、手輿つくらせ給て、によふによふ擔はれ給て家に入給ひぬるを、いかでか聞きけん、遣はしゝ男どもまゐりて申やう、「龍の頸の玉をえ取らざりしかばなん、殿へもえまゐらざりし。玉の取りがたかりし事を知り給へればなん、勘當あらじとてまゐりつる」と申。大納言起きゐて宣はく、「汝らよくもて來ずなりぬ。龍は鳴る神の類にこそありけれ。それが玉を取らむとて、そこらの人々の害せられなむとしけり。まして龍を捕へたらましかば、又、こともなく、我は害せられなまし。よく捕へずなりにけり。かぐや姫てふ大盗人の奴が、人を殺さんとするなりけり。家のあたりだに、いまはとほらじ。男ども、なありきそ」とて、家に少し殘りたりける物どもは、龍の玉を取らぬ者どもにたびつ。これを聞きて、離れ給ひしもとの上は、腹をきりて笑ひ給。絲を葺かせ造りし屋は、鳶・烏の巣に、みなくひもて往にけり。世界の人の言ひけるは、「大伴の大納言は、龍の頸の玉や取りておはしたる」「いな、さもあらず。御眼二に、杏のやうなる玉をぞ添へていましたる」と言ひければ、「あなたへがた」と言ひけるよりぞ、世にあはぬ事をば、「あなたへがと」とは言ひはじめける。

燕の子安貝

中納言いそのかみのまろたりの、家に使はるゝ男どものもとに、「燕の巣くひたらば、告げよ」とのたまふを、うけたまはりて、「何の用にかあらん」と申。答へての給やう、「燕のもたる子安の貝を取らむ料也」とのたまふ。男ども答へて申、「燕をあまた殺して見るだにも、腹に何もなき物也。たゞし、子産む時なん、いかでか出すらむ。はらくかと申。人だに見れば失せぬ」と申。又、人の申やうは、「大炊寮の飯炊く屋の棟に、つくの穴ごとに、燕は巣をくひ侍る。それに、まめならむ男どもをゐてまかりて、あぐらを結ひあげて、窺はせんに、そこらの燕、子産まざらむやは。さてこそ取らしめ給はめ」と申。中納言喜び給て、「をかしき事にもあるかな。もつともえ知らざりつる。興あること申たり」との給て、まめなる男ども廿人ばかりつかはして、あなゝひにあげ据ゑられたり。殿より使ひまなくたまはせて、「子安の貝取りたるか」と問はせ給。燕も、人のあまた上りゐたるにおぢて、巣にも上り來ず。かゝるよしの返事を申たれば聞き給て、いかゞすべきと思し煩ふに、かの寮の官人、くらつまろと申翁申やう、「子安貝取らんと思しめさば、たばかり申さん」とて、御前にまゐりたれば、中納言、額を合せてむかひ給へり。くらつまろが申やう、「此燕の子安貝は、惡しくたばかりて取らせ給なり。さてはえ取らせ給はじ。あなゝひにおどろおどろしく廿人の人の上りて侍れば、あれて寄りまうで來ず。せさせ給べきやうは、このあなゝひをこぼちて、人みな退きて、まめならん人ひとりを粗籠に乘せ据ゑて、綱をかまへて、鳥の、子産まむあひだに、綱をつりあげさせて、ふと子安貝を取らせ給はんなむ、よかるべき」と申。中納言の給やう、「いとよき事也」とて、あなゝひをこぼし、人みな歸りまうで來ぬ。中納言、くらつまろにのたまはく、「燕は、いかなる時にか子産むと知りて、人をばあぐべき」との給。くらつまろ申やう、「燕子産まむとする時は、ををさゝげて七度めぐりてなん、産み落すめる。さて、七度めぐらんをり、引きあげて、そのをり、子安貝は取らせ給へ」と申。中納言喜び給て、よろづの人にも知らせ給はで、みそかに寮にいまして、男どもの中に交じりて、夜るを晝になして取らしめ給。くらつまろかく申を、いといたく喜びて、のたまふ。「こゝに使はるゝ人にもなきに、願を叶ふることのうれしさ」とのたまひて、御衣ぬぎてかづけ給つ。「さらに、夜さりこの寮にまうで來」との賜て、つかはしつ。日暮れぬれば、かの寮におはして見たまふに、まことに燕巣つくれり。くらつまろ申やう、尾浮けてめぐるに、粗籠に人をのぼせて釣りあげさせて、燕の巣に手をさし入させて探るに、「物もなし」と申に、中納言、「惡しく探ればなき也」と腹立ちて、「誰ばかりおぼえんに」とて、「吾上りて探らむ」とのたまうて、籠に乘りて釣られ上りて、窺ひ給へるに、燕、尾をさゝげていたくめぐるに合はせて、手をさゝげて探り給に、手に平める物さはる時に、「われ、物握りたり。いまは下してよ。翁、し得たり」との給。集まりてとく下さんとて、綱を引きすぐして、綱絶ゆるすなはちに、八島の鼎の上に、のけざまに落ち給へり。人々あさましがりて、寄りて抱えたてまつれり。御目は白目にて臥し給へり。人々水をすくひ入たてまつる。からうじて息出給へるに、又、鼎の上より、手取り足取りして、さげ下したてまつる。からうじて、「御心地はいかゞおぼさるゝ」と問へば、息の下にて、「物はすこし覺ゆれども、腰なん動かれぬ。されど子安貝をふと握りもたれば、うれしくおぼゆる也。まづ紙燭さして來。この貝、顔見ん」と、御髪もたげて、御手をひろげ給へるに、燕のまりおけるふる糞を握り給へるなりけり。それを見たまひて、「あな、かひなのわざや」との給けるよりぞ、思ふにたがふ事をば、「かひなし」とは言ひける。貝にもあらずと見給けるに、御心地もたがひて、唐櫃のふたに入れられ給べくもあらず、御腰はをれにけり。中納言は、わらはげたるわざして病むことを、人に聞かせじとし給けれど、それを病にて、いと弱く成た

まひにけり。貝をばえ取らずなりにけるよりも、人の聞き笑はんことを、日にそへて思ひ給ひければ、たゞに、病み死ぬるよりも、人聞き恥づかしくおぼえ給なりけり。これをかぐや姫聞きて、とぶらひにやる歌、

年をへて浪たちよらぬ住の江の松かひなしときくはまことか

とあるを、よみて聞かす。いとよわき心に、頭もたげて、人に紙を持たせて、苦しき心ちにからうじて書き給、

かひはかく有ける物をわびはてゝしぬる命をすくひやはせぬ

と書きはつる、絶え入給ひぬ。これを聞きて、かぐや姫すこしあはれと思しけり。それよりなん、すこしうれしき事をば、「かひある」とは言ひける。

帝の求婚

さて、かぐや姫、かたちの世に似ずめでたきことを、御門きこしめして、内侍なかとみのふさこにのたまふ、「多くの人の身をいたづらになしてあはざなるかぐや姫は、いかばかりの女ぞと、まかりて見てまゐれ」とのたまふ。ふさこ、うけたまはりてまかれり。竹取の家にかしこまりて請じ入れて、會へり。女に内侍のたまふ、「仰ごとに、かぐや姫のかたち優におはす也、よく見てまゐるべき由のたまはせつるになむ、まゐりつる」と言へば、「さらば、かく申侍らん」と言ひて入りぬ。かぐや姫に、「はや、かの御使に對面し給へ」と言へば、かぐや姫、「よきかたちにもあらず。いかでか見ゆべき」と言へば、「うたても、のたまふかな。御門の御使をば、いかでかおろかにせむ」と言へば、かぐや姫答ふるやう、「御門の召してのたまはん事、かしこしとも思はず」と言ひて、さらに見ゆべくもあらず。産める子のやうにあれど、いと心恥づかしげに、おろそかなるやうに言ひければ、心のまゝにもえ責めず。女、内侍のもとに歸り出て、「くちをしく、このをさなきものは、こはくはべるものにて、對面すまじき」と申す。内侍「必ず見たてまつりてまゐれ、と仰せ事ありつるものを、見たてまつらでは、いかでか歸りまゐらむ。國王の仰ごとを、まさに世に住み給はん人の、うけたまはり給はで有なむや。いはれぬ事なし給ひそ」と、言葉恥づかしく言ひければ、これを聞きて、ましてかぐや姫、聞くべくもあらず。「國王の仰ごとを背かば、はや殺し給ひてよかし」と言ふ。此内侍歸り、このよしを奏す。御門きこしめして、「多くの人殺してける心ぞかし」とのたまて、やみにけれど、猶思しおはしまして、この女のたばかりにや負けむ、と思して、仰せ給、「汝が持ちて侍るかぐや姫たてまつれ。顔かたちよしときこしめして、御使をたびしかど、かひなく見えず成にけり。かくたいだいしくやは習はすべき」と仰せらる。

翁、かしこまりて御返事申すやう、「この女の童は、たえて宮仕へつかうまつるべくもあらず侍るを、もてわづらひ侍り。さりとも、まかりて仰せたまはん」と奏す。これをきこしめして、仰せ給ふ、「などか、翁の手におほし立てたらむものを、心にまかせざらむ。この女もし奉りたるものならば、翁に冠を、などかたまはせざらん」翁、喜びて、家に帰りてかぐや姫にかたらふやう、「かくなむ帝の仰せ給へる。なほやは仕うまつり給はぬ」と言へば、かぐや姫答へていはく、「もはら、さやうの宮仕へ仕うまつらじと思ふを、しひて仕うまつらはせ給はば、消え失せなむず。御官冠つかうまつりて、死ぬばかりなり」。翁いらふるやう、「なしたまひそ。官冠も、わが子を見たてまつらでは、何にかはせむ。さはありとも、などか宮仕へをしたまはざらむ。死に給べきやうやあるべき」と言ふ。

「なほ虚言かと、仕うまつらせて、死なずやあると見給へ。あまたの人の、心ざしおろかならざりしを、空しくしなしてこそあれ。昨日今日帝ののたまはんことにつかん、人聞きやさし」と言へば、翁、答へていはく、「天下の事は、とありとも、かゝりとも、御(ミ)命の危さこそ、大きなる障りなれば、なほかう、仕うまつるまじき事を、まゐりて申さん」とて、まゐりて申すやう、「仰せのことのかしこさに、かの童を、まゐらせむとて仕うまつれば、『宮仕へに出し立てば死ぬべし』と申す。造麻呂(ミヤツコマロ)が手に生ませたる子にもあらず。昔、山にて見つけたる。かゝれば、心ばせも世の人に似ずぞ侍る」と奏せさす。帝仰せ給はく、「造麻呂が家は、山本近かんなり。御狩行幸(ミユキ)し給はんやうにて、見てんや」と、のたまはす。造麻呂が申すやう、「いとよき事なり。なにか心もなくて侍らんに、ふとみゆきして御覧ぜむに、御覧ぜられなむ」と奏すれば、御門、にはかに日を定めて御狩に出で給ひて、かぐや姫の家に入り給ひて見給ふに、光満ちてけうらにてゐたる人あり。

これならんと思して近く寄らせ給ふに、逃げて入る袖をとらへ給へば、面をふたぎてさぶらへど、はじめて御覧じつれば、類なくめでたくおぼえさせ給ひて、「許さじとす」とて、ゐておはしまさんとするに、かぐや姫答へて奏す、「おのが身は、この国に生まれて侍らばこそ使ひ給はめ。いとゐておはしましがたくや侍らん」と奏す。御門、「などかさあらん。なほゐておはしまさん」とて、御輿を寄せ給ふに、このかぐや姫、きと影になりぬ。はかなく、くちをしと思して、げにたゞ人にはあらざりけりとおぼして、「さらば御ともにはゐて行かじ。もとの御かたちとなり給ひね。それを見てだに帰りなむ」と仰せらるれば、かぐや姫もとのかたちに成ぬ。御門、なほめでたく思しめさるゝ事せき止めがたし。かく見せつる宮つこまろを喜び給ふ。さて仕うまつる。

百官の人々、あるじいかめしう仕うまつる。帝、かぐや姫を止めて帰り給はんことを、あかずくちをしく思しけれど、魂を止めたる心地してなむ帰らせ給ひける。御輿にたてまつりて後に、かぐや姫に、

帰るさの行幸もの憂く思ほえて　そむきてとまるかぐや姫ゆゑ

御返事を、

葎(むぐら)はふ下にも　年は経ぬる身の何かは　玉のうてなをも見む

これを、帝御覧じて、いかゞ帰り給はん空もなく思さる。御心は、さらにたち帰るべくも思されざりけれど、さりとて夜をあかし給ふべきにあらねば、帰らせ給ひぬ。常に仕うまつる人を見たまふに、かぐや姫の傍に寄るべくだにあらざりけり。こと人よりはけうらなり、と思しける人の、かれに思しあはすれば、人にもあらず。かぐや姫のみ御心にかゝりて、ただ独り住みし給ふ。よしなく御方々にもわたり給はず。かぐや姫の御もとにぞ、御文を書きて通はせ給ふ。御返りさすがに憎からず聞え交し給ひて、おもしろく、木草につけても御歌をよみてつかはす。

天の羽衣

かやうに、御心をたがひに慰め給ほどに、三年ばかりありて、春のはじめより、かぐや姫、月のおもしろく出でたるを見て、常よりも物思ひたるさまなり。ある人の、「月の顔見るは忌むこと」と制しけれども、ともすれば人までにも月を見ては、いみじく泣き給ふ。七月十五日の月に出でゐて、切に物思へる気色なり。近く使はるゝ人々、竹取の翁に告げていはく、「かぐや姫の、例も月

をあはれがり給へども、この頃となりては、たゞことにも侍らざめり。いみじく思し嘆く事あるべし。よくよく見たてまつらせ給へ」と言ふを聞きて、かぐや姫に言ふやう、「なんでふ心地すれば、かく、物を思ひたるさまにて、月を見たまふぞ。うましき世に」と言ふ。かぐや姫、「見れば、世間心ぼそくあはれに侍る。なでふ物をか嘆き侍るべき」と言ふ。かぐや姫のある所にいたりて見れば、なほ物思へる気色なり。これを見て、「あが仏、なに事思ひたまふぞ。思すらんこと何事ぞ」と言へば、「思ふこともなし。物なん心ぼそくおぼゆる」と言へば、翁、「月な見給ひそ。これを見給へば、物思す気色はあるぞ」と言へば、「いかで月を見ではあらん」とて、なほ、月出づれば、出でゐつゝ、嘆き思へり。夕やみには、物思はぬ気色なり。月の程になりぬれば、なほ、時々はうち嘆きなどす。これを、使ふ者ども、「なほ物思す事あるべし」とさゝやけれど、親をはじめて、何とも知らず。

八月十五日ばかりの月に出で居て、かぐや姫いといたく泣き給ふ。人目も、いまは、つゝみ給はず泣き給ふ。これを見て、親どもゝ「なに事ぞ」と問ひさわぐ。かぐや姫泣く泣く言ふ、「さきざきも申さむと思ひしかども、かならず心惑ひし給はんものぞと思ひて、いまゝで過し侍りつるなり。さのみやはとて、うち出で侍りぬるぞ。おのが身はこの国の人にもあらず。月の都の人なり。それを、昔の契りありけるによりてなん、この世界にはまうで来たりける。いまは帰るべきになりにければ、この月の十五日に、かのもとの国より、迎へに人々まうで来んず。さらずまかりぬべければ、思しなげかんが悲しき事を、この春より、思ひ嘆き侍るなり」と言ひて、いみじく泣くを、翁、「こは、なでふ事のたまふぞ。竹の中より見つけきこえたりしかど、菜種の大きさおはせしを、わが丈たちならぶまで養ひたてまつりたる我子を、なに人か迎へきこえん。まさに許さんや」と言ひて、「われこそ死なめ」とて、泣きのゝしる事、いとたへがたげなり。

かぐや姫のいはく、「月の宮の人にて、父母あり。かた時の間とて、かの国よりまうで来しかども、かく、この国にはあまたの年をへぬるになんありける。かの国の父母の事も覚えず、こゝには、かく久しく遊びきこえて、ならひたてまつれり。いみじからむ心地もせず、悲しくのみある。されどおのが心ならず、まかりなむとする」と言ひて、もろともにいみじう泣く。使はるゝ人々も、年頃ならひて、たち別れなむことを、心ばへなどあてやかにうつくしかりつる事を見ならひて、恋しからむことの耐へがたく、湯水飲まれず、同じ心になげかしがりけり。

この事を御門きこしめして、竹取が家に御使つかはさせ給ふ。御使に竹取出会ひて、泣く事かぎりなし。此事をなげくに、髪も白く、腰もかゞまり、目もたゞれにけり。翁、今年は五十ばかりなりけれども、物思ふには、かた時になむ老になりにけると見ゆ。御使、仰事とて翁にいはく、「いと心苦しく物思ふなるは、まことか」と仰せ給ふ。竹取泣く泣く申す。「この十五日になん、月の都より、かぐや姫の迎へにまうで来なる。たふとく問はせ給ふ。この十五日は、人々賜はりて、月の宮この人まうで来ば捕へさせん」と申す。御使帰りまゐりて、翁の有様申して、奏しつる事ども申すを、きこしめして、の給、「一目見たまひし御心にだに忘れ給はぬに、明暮見なれたるかぐや姫をやりては、いかゞ思ふべき」

かの十五日、司々に仰せて、勅使少將高野のおほくにといふ人をさして、六衛の司あはせて二千人の人を、竹取が家に遣す。家にまかりて、築地の上に千人、屋の上に千人、家の人々いと多かりけるに合はせて、空ける隙もなく守らす。この守る人々も弓矢を帯して、母屋の内には、女どもを番にをりて守らす。女、塗籠の内に、かぐや姫を抱へてをり。翁、塗籠の戸をさして、

戸口にをり。翁のいはく、「かばかり守る所に、天の人にも負けむや」と言ひて、屋の上にをる人々にいはく、「つゆも、物空にかけらば、ふと射殺し給へ」。守る人々のいはく、「かばかりして守る所に、蚊ばかり一だにあらば、まづ射殺して、外に曝さんと思ひ侍る」と言ふ。翁これを聞きて頼もしがりけり。これを聞きてかぐや姫は、「さし籠めて、守り戦ふべきしたくみをしたりとも、あの国の人を、え戦はぬなり。弓矢して射られじ。かくさし籠めてありとも、かの国の人来ば、みな開きなむとす。あひ戦はんとすとも、かの国の人来なば、猛き心つかふ人も、よもあらじ」。

翁の言ふやう、「御迎へに来む人をば、長き爪して、眼をつかみ潰さん。さが髪をとりて、かなぐり落とさむ。さが尻をかき出でゝ、こゝらの公人に見せて、恥を見せん」と腹立ちをる。かぐや姫いはく、「声高に、なのたまひそ。屋の上にをる人どもの聞くに、いとまさなし。いますかりつる心ざしどもを思ひも知らで、まかりなむずる事の口惜しう侍りけり。長き契りのなかりければ、程なくまかりぬべきなめりと思ふが、悲しく侍るなり。親達の顧をいさゝかだに仕うまつらで、まからむ道も安くもあるまじき。日頃も出でゐて、今年ばかりの暇を申しつれど、さらに許されぬによりてなむ、かく思ひ嘆き侍る。み心をのみ惑はして去りなむことの、悲しく耐へがたく侍るなり。かの都の人は、いとけうらに、老をせずなん。思ふ事もなく侍るなり。さる所へまからむずるも、いみじくも侍らず。老い衰へ給へるさまを見たてまつらざらむこそ、恋しからめ」と言ひて、翁、「胸痛き事、なしたまひそ。うるはしき姿したる使にも障らじ」と、ねたみをり。

かゝる程に、宵うち過ぎて、子の時ばかりに、家のあたり昼の明さにも過ぎて光りわたり、望月の明さを十あはせたるばかりにて、ある人の毛の穴さへ見ゆるほどなり。大空より人、雲に乗りて下り來て、土より五尺ばかり上りたる程に、立ち列ねたり。これを見て、内外なる人の心ども、ものにおそはるゝやうにて、あひ戦はん心もなかりけり。からうじて思ひ起して、弓矢をとり立てんとすれども、手に力もなくなりて、萎えかゝりたり。中に心さかしき者、念じて射んとすれども、外ざまへ行きければ、あれも戦はで、心地たゞ痴れに痴れて、まもり合へり。立てる人どもは、装束の清らなること、物にも似ず。飛車一つ具したり。羅蓋さしたり。その中に王とおぼしき人、家に「造麻呂、まうで來」と言ふに、猛く思ひつる造麻呂も、物に酔ひたる心地して、うつ伏しに伏せり。いはく、「汝、をさなき人、いさゝかなる功徳を翁つくりけるによりて、汝が助けにとて、かた時のほどとて下しゝを、そこらの年頃、そこらの金給て、身をかへたるがごとなりにたり。かぐや姫は、罪をつくり給へりければ、かく賤しきおのれがもとに、しばしおはしつるなり。罪の限り果てぬればかく迎ふるを、翁は泣き嘆く。能はぬ事なり。はや出したてまつれ」と言ふ。

翁答へて申、「かぐや姫を養ひたてまつること二十余年になりぬ。かた時とのたまふに、あやしくなり侍りぬ。又異所に、かぐや姫と申人ぞおはすらん」と言ふ。「こゝにおはするかぐや姫は、重き病をし給へば、え出でおはしますまじ」と申せば、その返事はなくて、屋の上に飛車を寄せて、「いざ、かぐや姫。穢き所にいかでか久しくおはせん」と言ふ。立て籠めたるところの戸、すなはち、たゞ開きに開きぬ。格子どもゝ、人はなくして開きぬ。女抱きてゐたるかぐや姫、外に出ぬ。え止むまじければ、たゞさし仰ぎて泣きをり。竹取心惑ひて泣き伏せる所に寄りて、かぐや姫言ふ、「こゝにも心にもあらでかくまかるに、昇らんをだに見おくり給へ」と言へども、「なにしに、悲しきに見おくりたてまつらん。我をいかにせよとて、捨てゝは昇り給ふぞ。具して率ておはせね」と泣きて伏せれば、心惑ひぬ。「文を書きおきてまからん。恋しからむをりをり、とり出でて見給へ」とて、うち泣きて書く言葉は、「この国に生まれぬるとならば、嘆かせたてまつらぬほどま

で侍らで、過ぎ別れぬる事、返すがへす本意なくこそおぼえ侍れ。脱ぎおく衣を形見と見給へ。月の出でたらむ夜は、見おこせ給へ。見捨てたてまつりてまかる、空よりも落ちぬべき心地する」と書きおく。

天人の中に持たせたる箱あり。天の羽衣入れり。又あるは不死の薬入れり。ひとりの天人言ふ、「壺なる御薬たてまつれ。穢き所の物きこしめしたれば、御心地悪しからむものぞ」とて、もて寄りたれば、わづか嘗め給ひて、すこし形見とて、脱ぎおく衣に包まんとすれば、ある天人包ませず。御衣をとり出て着せんとす。その時にかぐや姫、「しばし待て」と言ふ。「衣着せつる人は、心異になるなりといふ。もの一言言ひおくべき事ありけり」と言ひて、文書く。天人、おそしと心もとながり給ふ。かぐや姫、「もの知らぬこと、なのたまひそ」とて、いみじく靜かに、公に御文たてまつり給ふ。あわてぬさまなり。「かくあまたの人を賜ひて止めさせ給へど、許さぬ迎へまうで来て、とりゐてまかりぬれば、くちをしく悲しきこと。宮仕へ仕うまつらずなりぬるも、かくわづらはしき身にて侍れば。心得ず思しめされつらめども、心強くうけたまはらずなりにし事、なめげなる物に思しめし止められぬるなん、心にとゞまり侍りぬる」とて、

今はとて天の羽衣きるをりぞ　君をあはれと思ひいでける

とて、壺の薬そへて、頭中將呼びよせて、たてまつらす。中將に天人とりて伝ふ。中將とりつれば、ふと天の羽衣うち着せたてまつりつれば、翁をいとほしく、かなしと思しつる事も失せぬ。此衣着つる人は、物思ひなくなりにければ、車に乗りて、百人ばかり天人具して、昇りぬ。

その後、翁・女、血の涙を流して惑へど、かひなし。あの書おきし文を読み聞かせけれど、「なにせむにか命もをしからむ。たがためにか。何事も用もなし」とて、薬も食はず、やがて起きもあがらで、病み臥せり。中將、人々具して帰りまゐりて、かぐや姫を、え戦ひ止めずなりぬる事、こまごまと奏す。薬の壺に御文そへ、まゐらす。ひろげて御覧じて、いといたくあはれがらせ給て、物もきこしめさず。御遊びなどもなかりけり。大臣上達を召して、「いづれの山か天に近き」と問はせ給ふに、ある人奏す、「駿河の国にあなる山なん、この都も近く、天も近く侍る」と奏す。これを聞かせ給ひて、

逢ことも涙にうかぶ我身には死なぬくすりも何にかはせむ

かの奉る不死の薬に、又、壺具して、御使に賜はす。勅使には、つきのいはかさといふ人を召して、駿河の国にあなる山の頂にもてつくべきよし仰せ給ふ。嶺にてすべきやう教へさせ給ふ。御文、不死の薬の壺ならべて、火をつけて燃やすべきよし仰せ給ふ。そのよしうけたまはりて、つはものどもあまた具して山へ登りけるよりなん、その山を「ふじの山」とは名づけゝる。その煙、いまだ雲のなかへたち上るとぞ、言ひ伝へたる。